

『第3回 佐賀市立小・中学校の在り方検討委員会』
会 議 録

開 催 日	令和8年7月15日（水）	
開催時間	午前10時00分 ～ 午前11時25分	
開催場所	佐賀市役所大財別館4階 4－3会議室	
出席者	委員等	嘉村委員長、草場副委員長、小城原委員、梅崎委員、辻委員、中尾委員、江口委員、森委員、釋委員、川副委員、下川委員
	事務局等	丹宗教育長、堤教育委員（教育長職務代理者）、山田教育委員、槇原教育委員、横田教育部長、岩瀬副部長兼教育総務課長、川副学事課長、水田学事課副課長兼学務係長、湊上学校教育課長、野中学校教育課義務教育指導係長、（担当 教育総務課）江口、野中、佐藤
議 事	議題 佐賀市立小・中学校の望ましい規模・配置等について	
欠 席 委 員	なし	
傍 聴 者	4名（うち報道3名）	

議 事

1 開会

2 教育長挨拶

3 議題

佐賀市立小・中学校の望ましい規模・配置等について

(事務局)

- ・資料1に沿って、佐賀市立小・中学校の望ましい規模・配置等について説明

(委員長)

- ・事務局の説明を振り返ると、前回までの会議の中で、望ましい教育環境を作るためには、ある一定程度の児童生徒数が必要だという意見が多く、ただし、教職員の体制を整え、両輪で回していくことも必要ではないかとの意見があった。具体的な数字としては、クラス替えができる規模がいいという意見、3クラスはあった方がいいという意見があった。ここまでが前回の会議において理解を得たものだと思う。
- ・委員から要望のあった、時間外在校時間の資料も提示していただき、勤務時間の縮減はある程度図られてはいるが、そこまでは至っていないというのが現状。
- ・今回事務局から、5年ぐらい前に統合した久留米市の事例を挙げていただいた。総じて、当初不安はあったものの、実際はやってよかったという検証結果が出ているものと感じた。
- ・さらに事務局案として、具体的な数字が入った“望ましい規模”の提案があった。この事務局案を見ながら委員の皆様の意見をいただきたい。

(委員)

- ・学級数はクラス替えのできる規模となる3クラスでいいと思う。
- ・1クラス何人という話はしていないのか。

(委員長)

- ・基本的に1クラスの人数は、法令どおりで35人を超えたら2クラス目が発生し、学級数が決まっていくと理解している。

(委員)

- ・理想を言えば、先生の目の届く範囲内で、なおかつ、25人とか少ない人数で1クラス作ることができれば、60人で3クラスできることになる。

(委員長)

- ・学年に70人の子どもがいたら1クラス35人以下なので、3クラスできると言えばできるが、おそらく国の法令上その分3クラスに先生の配置があるかは分からない。

(委員)

- ・ そうであれば、あまり子どものためにならないのではないか。
- ・ 今、空き教室はあるのに、現在の教室は子どもの机同士が近く一杯一杯。
- ・ 1 クラスの子ども数を調整して 3 クラスにすれば理想に近づく。また一人の先生がみる子どもの数も減らすことができると思う。

(委員)

- ・ 特別支援学級の児童数も念頭に置いておく必要がある。
- ・ 特別支援学級の子どもが、交流授業で通常学級に戻ってくると、児童数が増える状況も発生している。
- ・ 統合する場合、法令上の職員数は決まっており、統合後の児童数を念頭に置いた議論も必要。

(委員長)

- ・ 次に、資料 22 ページを見ながら意見を伺いたい。

(委員)

- ・ 久留米市の資料について県内の多久、伊万里、唐津でも統合した学校があった。その情報を載せられなかった経緯はあるのか。

(事務局)

- ・ 掲載した資料のように、統合した結果として保護者や、子どもたちのアンケート結果をまとめて公表されている事例が少なく、お示しするのであれば整理されたものをお見せしたいと、今回の久留米市の資料を利用させていただいた。

(委員長)

- ・ 確かに、他市のアンケートも拝見したが、職員数とか調べても今回の久留米市の資料がより詳しくかったと思う。

(委員)

- ・ 児童の学級数については、2～3 学級が望ましいと感じている。
- ・ 少人数の意見として、授業が騒がしくなる、発表の機会が減少する、トラブルが増加する、バス通学による体力の低下、といった懸念の声が挙げられているため、このことについても考えておく必要がある。
- ・ 統合を進めるにあたっては、学校運営面での人員確保が必要。久留米市は、事前交流を 7 回も実施されており、その対応は大変だったと思う。また、地域の方や PTA 役員との協議は、職員の勤務時間内に行われていたのか、職員の健康面への配慮も同時に考えることが必要。
- ・ スクールバスの運用については、柔軟な下校時間の変更が難しくなることや、登下校が学校管理下になるのかなど、詳細な検討が必要と考える。

- ・事前の準備から事後の対応に至るまで、学校だけに任せるのではなく行政県・市を含め丁寧なバックアップが必要だと思う。

(委員長)

- ・具体的な望ましい規模について事務局案に対しての意見を伺いたい。
- ・35 人のクラスを 20 人で 2 クラスの方がより望ましいのはよく分かるが、法令上そのハードルを越えるのはかなり高く、佐賀市が独自に少人数学級を進めるには予算的にもかなり困難ではないかと思っている。

(委員)

- ・久留米市の事例の中で、クラブ活動の数が減る、複式学級では 2 学年で一緒にしていたのを全部 1 学級で集中した授業ができた、とか、新しい友達に触れて切磋琢磨できた、など、子どもたちの意見が出ていて、小規模校の課題がとても改善されていると思う。また、アンケートでも 90 パーセント以上の方が好意的な意見を出されている。
- ・一方、デメリットのところ、子どもたちの意見の中に、人数が多いのは苦手、との意見があった。人数が多いのが苦手な子どもたちは小規模校を選んで登校している子どももいるので、どう対応されたのか。

(事務局)

- ・今時点、手元の情報ではその部分までの回答は持っていない。引き続き情報提供をいただきながら、勉強していきたい。

(委員)

- ・中学校の一学年あたり 3 学級、全体で 9 学級からという提示はハードルが高いと思う。資料を見ると昭栄中学校ではこの 35 年で生徒数が 1,000 人から約半分の 500 人になっている。今後、昭栄中学校には通ってくる小学校 1 年生が 1 学級になっているところをみると 3 学級、35 人のままだとかなりハードルが高い。
- ・しかし財政面を考えると、佐賀市が設置している学校数を考えると、35 人を下回る人数の設定は厳しいと思った。この 35 人を維持するとなれば、9 学級の設定については議論が必要だと思う。
- ・今後の学校を考えた時、多様な意見を受け入れ、批判的な思考で見ながら、一つの合意形成とコンセンサスを取っていく訓練は、小規模校ではなかなか難しい。今後の日本、世界を考えた時、多様な環境で揉まれ、生きていくことをしっかりと小・中学校で経験させないといけない。
- ・理想は 9 学級と思うが、現実として 10 年、20 年後の数を見て、基準を決めていけたらと思う。

(委員長)

- ・事務局が示しているこの案は、望ましい規模はどの程度のものかということであり

この数字から外れたら即ということではなく、外れた時はどう対応してくかという次の案があると思う。

- ・ここまでの議論を踏まえ、こういう規模が望ましいだろうという事務局案をどう思うか、意見ををお願いしたい。

(委員)

- ・久留米地区は統廃合が進められており、小・中の義務教育学校など多彩で良い形で環境を作っていこうと検討されている。
- ・久留米市のあるニュータウン団地では昭和 57 年に人口が増え 1,000 人ほどの小学校ができたが、令和 6 年に児童数が 51 人になり、昨年度閉校となった。郡部の方でも児童数が減り統廃合の話が進んでいる。一方で 1,000 人規模の学校もあることから、差が激しい。
- ・教育委員会が Q&A を公表したり、住民説明を実施し不満を聞いていただくなど住民に対し、十分説明されていると感じている。
- ・佐賀市のこれからの子どもの動向を見通すことは困難だが、最低でも 1 学年あたり 3 クラス程度が必要ではないかと考える。小学校から 1 クラスでカラーが決まった段階で中学校になると、引き継いだまま 3 年間を過ごすこととなり、これによいのかと感じている。最低 3 クラス程度ある方が、子どもたちが集団に関わって自分の考えを発揮できる環境になると考える。
- ・単に人数の基準だけで判断すると、将来学校を統合せざるを得なくなるという懸念もあるが、中学校では 1 学年 3 クラスあると学びの質や活動を考えるとよいのではないと思う。

(委員長)

- ・続いて地域からの意見を伺いたい。

(委員)

- ・佐賀市の状況を見るとどう統合してくのが非常に難しい。
- ・再編の理想ですが、我々の時は 1,000 人～2,000 人、今は 250 人程。どう生徒を増やすか、地域や PTA と一緒になって考えているがなかなか PR できない。
- ・今の多様性の中でどう子どもたちが育っていくのか、この理想に近づけるためにどう我々は考えていくのか、これが課せられた問題だと思う。

(委員)

- ・三瀬では生徒数も少なく、昨年は出生がゼロだった。
- ・この委員会に出席し、学校の校長先生とも年 2 回程協議しているが、その中では、子どもが多くても、少なくても良い、という先生たちの意見がある。
- ・三瀬には定期バスがなく、コミュニティバスを乗り換えていく。富士大和温泉病院まで行き、乗り換え、また神埼駅まで行き、JR に乗り換える。
- ・以前、バスで脊振を経由して帰宅する際、脊振中学校の生徒と同乗した。神埼から

バス通学している理由を尋ねたところ、集団生活ができないから、と3名の子どもたちが話してくれ、そういう子もいるのだと思った。

- ・三瀬のように生徒数が少ない学校では、人との交往が苦手になっているのかなと思うが、生徒数が多く賑やかな学校がある一方、少ない人数でも賑やかな学校生活を送ることができるのではと考えている。

(委員)

- ・子どもにとっての望ましい規模、配置等を、小学校と中学校で提案していただいているが、これについて違和感はない。
- ・久留米市の事例の中で保護者の方が、子どもに向き合う時間が少なくなるのでは、という意見は言い換えれば、規模がどうなろうと子どもに向き合う時間を取ってほしい、との期待だと思う。
- ・学級数の規模に関わらず、今までどおり子どもに向き合う時間が確保できていますよね、人数が多い学級でトラブルが発生しても対応できる先生がいますよね、という保護者の期待があると思う。
- ・この期待に応えることはできるのか、今の教育現場の現状を踏まえ、先生方にお伺いしたい。

(委員長)

- ・子どもに向き合う時間が減るのではないかと、といった懸念について、今の佐賀市の教育現場に置き換えて、このような事態に答える余裕があるのかどうか、率直なご意見をお伺いしたい。

(委員)

- ・各学校の状況で大きく違ってくることを前提とした上で、人数が増えるとやはりトラブルは増えて、それを成長の過程、多様性と捉えていくことは重要である。
- ・一方で、そこには多くの時間が必要で、学校現場で職員が見てないときトラブルが発生すると、それだけで聞き取りに多くの時間がかかり、現状、対応できる時間及び職員数は十分とは言えない。現在トラブルに対し先生が2名体制で話を聞くと、その間その学級の授業は進まず、その後の保護者への連絡等を考えると、多くの時間を費やし、結果として授業準備に行きつかないことになる。トラブル頻度が増えてくれば、相当な難しさを感じる。

(委員)

- ・学校の中で一番多くの時間を割いているのは授業。トラブル対応についても授業の中で力をつけていき、子ども自身がトラブルを解決する。この解決する術を先生たちが授業の中とか、教育課程の中で教えていく必要がある。
- ・実際個別のトラブルがあった場合は、大きな学校であれば、その回数は必然的に多くなる。トラブルの回数ごとに先生が時間をとられ、他の子に関われる時間がなくなってしまうようにするため、まず授業の中で子どもが力をつけていく、これを前提に

やっていかなければならないと思う。学級数に関係なく、先生の関わりが維持できるのかは、先生たちが維持することを努めてやっている、そこは負けないようにやっている。件数が多いから、手が回らないで済ませたりはしない。

(副委員長)

- ・経験上、トラブルは学級内の児童・生徒数にあまり関係ない部分もある。
- ・ある程度の学級数があれば、先生の人数が多く、若干の余力もある。1人で対応できない場合も、最近のチーム学校という複数担任制であればチームで対応できる。
- ・1学級単位で考えると、児童・生徒が増えるほど先生が一人の子どもにかかわる時間は減るが、3人のクラスと30人のクラスで1人にかかわる時間が同じということとはあり得ない。
- ・しかしトラブルがあった時、ある程度の学級数があり、多様な先生方が配置されているほうが、対応はうまくいくといったことが経験上ある。
- ・小学校18学級の場合、正式な教員数は20人。
- ・小学校6学年で12学級の場合、一番少ない状況で考えると1クラス18人の2クラスで36人、全校で200人程度。多くて35人の2クラスで70人、全校で420人。18学級となると、多くて600人程度。児童数で考えるとかなり幅があるが、先生の人数で言うと12人から18人。
- ・子どもと先生の関係性や、また先生を集団で考えた時には、ある程度の学級数があったほうが結果的に一人の子どもに対する時間は確保できるのではないか。

(委員長)

- ・ここまでの意見を聞いてほかに何かあるか。

(委員)

- ・先生方の本当に何とかする、という意気込みを感じた。だからこそ私たち保護者が協力しなければと感じた。

(委員)

- ・久留米市のアンケートを確認したところ、統合前の、統合する前に不安はありましたか、という問いに、どちらかといえばなかった、という回答が圧倒的に多かったと言うことは、小規模校にもともと不安があった保護者が多かったのではないか。地域によって結果も変わってくると思う。
- ・山間部の富士三瀬地区の学校配置は、小中一貫校が3校、小学校が1校、その中で6つの校舎がある。小学校と中学校また、小中一貫校があるため、各校に校長先生がそれぞれ配置されている独特な環境になっている。
- ・綺麗な校舎もあれば年季の入った校舎もあり、どこを拠点にするのか、保護者としてはすごく気になるところ。子どもたちの学びの場としては、より綺麗な校舎であってほしいと考えている。
- ・スクールバスについて、小中一貫校の場合は小学校と中学校の下校時間が大幅に異

なり、中学校は部活などもあるため、現在運行されているコミュニティバスの増便を学校側へ要請をしている。国への申請も含め先延ばしになっている。このような面も統合にあたっては考慮する必要がある。

- ・人数は、提示されている人数であれば、子ども達にはいいと思う。1 クラス 2 人といたった経験をしているので、かわいそうだと思っている。やはり多いほうがよい。

(委員長)

- ・事務局案に対し様々な意見をいただいた。
- ・大人数が嫌いな人もいる。人数が増えれば、先生方の目が行き届くのか、きめ細かな指導が固持できるのか、そういった視点からいろいろな意見が出ると思う。ただ、2 クラス以上の学校のメリット、クラス替えができて、色々な教育活動が集団でできる環境、このメリットも大きいと確認できた。
- ・2 つ目の議論は、事務局案の望ましい規模がこのくらいであったとして、その対応の仕方については、23 から 24 ページに事務局案を挙げている。この案に対しての意見を伺いたい。

(委員)

- ・小学校で複式学級が存在する規模 1 から 5 学級を最優先に配置の検討をしていたきたい。本校は複式学級であり、かつ、通常学級の児童が存在せず、隣の学年ではない 3 年生と 5 年生の飛び複式学級で、授業がとても困難である。同じ学年に児童がいない中、飛んでいるクラスと一緒にクラスを形成している状況。
- ・ここに挙がっている以上に課題があるため、最優先に対応すべきだと思う。

(委員)

- ・1 年生 2 年生で考えると、1 年生は平仮名をやり、2 年生は九九をやる、それを一緒に授業する。そこが先生の苦勞で大変だと正直思う。特に、積み重ねの算数は、その学年で抑えるべきことを抑えていかないと厳しい。北山校では 2 年生対象に、すれ違う子どもに対し先生が、九九の問題の声かけをしていた。ちょっとしたことで基礎的なところを定着させていた。
- ・複式半分ずつになると、厳しい。特に中学校では 1 年生 2 年生 3 年生で勉強内容に差があるので複式は避けたほうがいい。中学校では特に複式を解消することが最重要だと思う。

(委員)

- ・私も複式の解消は必要だと思う。その際、子どもたちのことを考えると、解消過程の 1 年 1 年が勝負であり、仮に複式が発生した場合は、人員対応を検討することも重要だと思う。

(副委員長)

- ・小学校の 1 から 5 学級、中学校の 1 から 2 学級の複式学級の解消は最優先だと思う

う。

- ・複式ではないが、クラス替えができない場合、例えば複式にならない 13 人から 35 人まで、6 学年で 80 人の学校。35 人なら 6 学年で 200 人程度、学校としては小規模校だが、小規模校でも差がある。逆に 20 人くらいの学校と、20 人の学校が 2 クラスになれば 40 人になるためクラス替えができる。
- ・教科以外で児童生徒の社会性など、多様な考え方や人間関係を知る、様々な経験ということを考えると、やはりクラス替えのできる規模の学校の方がいいと思う。
- ・ただし、最優先すべきは複式の解消で、その次の段階として、クラス替えができるくらいの学校規模にした方がいいと思う。

(委員長)

- ・まとめに入る。
 - ・今日の意見交換、議論の中で、事務局が提示されている望ましい規模に関して、心配な点の指摘はいただいたが、この規模が望ましいとは言えないという意見ではなかったと思う。
 - ・この事務局案を判断の基準としていく方向に反対はなかった。一方で、委員から、可能なら法令を超えたものができれば、尚よいという意見もあった。
 - ・実際に対応を進めるにあたり、資料の 23 ページから 24 ページに示された事務局案について、当然優先順位は事務局案が最優先となる。これについて異論はないと、皆様の理解が得られたと思う。
- 私としては、この様にまとめたところだが、如何か。

(委員)

－異議等なし－

(委員長)

- ・委員からの意見はここで終了とする。

4 閉会